

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 5 月 5 日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K01123

研究課題名(和文) 博物館と知的障害特別支援教育のアクセスコーディネートに関する実践研究

研究課題名(英文) Practical Research on Access Coordination between Museums and Special Needs Education for Intellectual Disabilities

研究代表者

駒見 和夫 (KOMAMI, KAZUO)

明治大学・文学部・専任教授

研究者番号：20225577

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)： 知的特別支援学校と博物館の間に立ち、支援教育の場には博物館資料の学びを提供するとともに博物館利用学習の魅力と方法を伝え、博物館へは知的障害の教育に適った学習プログラムを提案し、これらを基にして両者をアクセスコーディネートする繋ぎのシステムを構築して実働させることに取り組んだ。

そのために、知的特別支援教育と連携した博物館出前交流を実践(特別支援学校および放課後支援施設)し、その検証から博物館学習教材の制作と学習プログラムの作成をおこなった。それらは知的特別支援教育と博物館をつなぐ目的で構築したウェブサイトで公開し、利用の促進をはかるとともに利用評価の調査を実施して、内容の深化に努めた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

共生社会に位置づく博物館の取り組みは、あらゆる人を包摂して参加を保障する仕組み作りから始まる。その進展の中で、博物館と知的障害の人たちの結びつきは、それぞれに対する理解や認識の欠如から著しく希薄な状況にある。博学連携が博物館の主要な活動に定着していながらも、博物館と知的特別支援学校との連携はほとんど進んでいない。

本研究はこの両者を繋ぐシステムのモデルケースを構築し、ソーシャル・インクルージョンの概念を博物館に育むことを目的とした。博物館を活用して知的障害の児童生徒の学びを促進させる本システムの構築は、博物館における包摂と共生の実現に寄与し、コミュニティの諸課題の解決につながるものと考えられる。

研究成果の概要(英文)： The project was to stand between special-needs schools for the mentally handicapped and the museum, to provide the special-needs schools with learning from museum materials and the attraction and methods of museum learning, to propose learning programmes suitable for the education of the mentally handicapped to the museum, and to build and implement a linkage system to coordinate access between them on the basis of these proposals. The project worked on the construction and implementation of a system to coordinate access between the two parties based on these proposals.

For this purpose, we conducted museum visits in conjunction with intellectual special-needs education, and based on the verification of these visits, we produced museum learning materials and created learning programmes. These were made public on a website that was built to link special-needs education and museums, and we promoted their use, conducted a survey on their evaluation, and worked to deepen their content.

研究分野：博物館教育学

キーワード：博物館教育 インクルーシブ教育支援 インクルーシブ・ミュージアム 博学連携 博物館出前交流  
ソーシャル・インクルージョン

## 1. 研究開始当初の背景

ICOM 京都大会（2019年9月）では博物館定義の改正案が提起・議論された。現代の社会動向が反映された新たな定義案では、博物館はオブジェの場ではなく、コミュニティにおける諸課題の解決に向けた社会的な活動体とみる認識があり、多様な人々を包摂し、参加と出会いをもたらしてこそ博物館にはその価値が生じるとする文脈であった。この案は継続検討となり2022年に一部を改めて成立となったが、根底の認識は京都大会での提示を継承するものであった。今日求められる博物館はあらゆる人を包摂して、交流や啓発を生み出し活動する機関なのである。

包摂という観点で、日本ではソーシャル・インクルージョンの概念に基づく博物館研究は少ない。多様な人々の博物館参加を進める動向としては、博物館バリアフリーやハンズ・オン展示、ユニバーサル・ミュージアムなどの検討と実践が進められてきた。これらは主に身体障害と身体機能の低い人々の利用の保障を図る思考で、施設設備や展示手法の研究実践が中心となっている。そこでは教育の質を整えて機会を保障するインクルーシブの観点に欠けるため、知的障害の人たち、とくにその学齢期の子どもたちの博物館利用を見据えた研究や実践の蓄積が、乏しい状況にある。

博物館の学びを多様な人にひらく従来の取り組みは、主として物理的アクセスを整えることで保障しようとしてきたため、知的障害には目が向けられなかった。知的障害の児童生徒に博物館の学びを保障する実践研究は、教育を役割とする生涯学習社会の博物館の位置づけをより明確にできる。同時に、ICOMの博物館定義案に示されていた「人間の尊厳と社会正義、世界全体の平等と地球全体の幸福への寄与」とする博物館の目的に近づく取り組みになり得る。

## 2. 研究の目的

本研究は、知的特別支援学校と博物館の間に立ち、支援教育の場には博物館資料の学びを提供するとともに博物館利用学習の魅力と方法を伝え、博物館へは知的障害教育に適った学習プログラムを提案し、これらを基にして両者をアクセスコーディネートする繋ぎのシステムの構築と実働を目的とした。内容は、知的特別支援学校と連携した博物館出前交流（子どもたちと同じ目線で向き合うことを目指す点で、出前講座よりも出前交流という認識が肝要と考えた）の実践と、博物館と連携した博物館学習教材の制作および学習プログラムの作成が中心である。そのうえで、知的障害特別支援教育に学びをひらく方法を博物館に提供し、その子どもたちの博物館を活用した学びの実現を推し進めた。

知的障害特別支援教育と博物館を繋ぐことは、今日の社会的課題である共生社会の展開において、また生涯学習体制の整備の点からも進めるべき博物館学の喫緊の課題と考える。知的特別支援学校においては、子どもたちの自立とキャリア発達が重点課題となっており、博物館はその有益な場と位置づけることも可能である。

また、本課題は博物館においてソーシャル・インクルージョンの理念を実際化する実践研究であり、追究の少ない当該思考に基づく博物館研究の深化に貢献し、共生社会に位置づく博物館の実現に展望を開くことを社会的な目的に位置づけた。

## 3. 研究の方法

まず、知的特別支援教育と連携した博物館出前交流のプログラム作成と実践に取り組んだ。児童生徒の博物館学習に対する理解を深めて利用を促すには、アウトリーチの学習プログラムが効果的であることをすでに検証してきた。その成果を下地に、知的特別支援学校に適った博物館出前交流プログラムを作成・実践した。知的障害の子どもたちへの出前交流はチームティーチングの体制が適切であるため、明治大学学芸員養成課程の学生の参加を得てその実践教育の機会にも位置づけた。

つぎに、博物館の様子を知り利用を模擬体験できるデジタルコンテンツを制作し、博物館実地利用における教材および学習支援プログラムを作成した。教材は子どもたちの興味を安全に引き出すものを、コンテンツは多様な場面での活用が可能で双方向性のコミュニケーションツールとなるものをそれぞれ工夫した。

さらに、知的特別支援学校に向けた博物館学習支援の実態を把握するために、実地と聞き取りの調査を実施してデータベースを作った。コロナ禍でもあったため、博物館のオンラインツールについても重点を置いて調査した。東京 23 区内の学校が利用できる都内の博物館を中心に、実情に応じて周辺の県も対象に加えた。このデータベースをもとに、知的特別支援教育と博物館をつなぐウェブサイト「いんくるん」を開設した。ウェブサイトをアクセスコーディネートシステムの中心に位置づけ、知的障害の子どもたちの博物館利用、および博物館の知的特別支援教育の受け入れの促進を図った。

#### 4. 研究成果

##### (1) 知的障害特別支援教育への博物館出前交流の実践

知的障害の子どもたちへの博物館出前交流は、特別支援学校小学部 4 年生の学級と、日中一時支援事業所の小学部グループで実施した。いずれも、障害の程度が軽度から重度の児童への一斉講座であった。各児童の理解度の差が大きいことは学習プログラムを進めるうえで難点となるが、特別支援学校の場合、同学年の全児童への実施は公平性の点で学校側のニーズが強く、また学級別に時間を分けるのは授業カリキュラムに組み込みにくい。また、日中一時支援事業所も通所の子どもたちを区分することは実情に合わず、障害の程度や学年が多様なものとなる。このような実践を通して、出前交流で扱う教材やプログラムは、幅ひろい子どもたちの実態に合うものであることが求められた。プログラムや教材の開発はこの点を勘案して進めた。

また、多様な理解度の児童に対応できるよう、交流スタッフを 4~6 人の態勢で組み、教員グループとのチームティーチングを進めることを心掛けた。スタッフにはコミュニケーターの役割を効果的に果たすための行動指標を示し、児童の学習を促すための具体的なポイントや問いかけ、自立の方向を援助する対応の留意点などについて、相互に確認・認識する検討会を事前に設けて実践に臨んだ。各児童の行動や興味関心はしばしば予期しない方向に展開し、具体的な対応は想定通りにはできない部分も多かった。けれども、行動指標と具体的な対応を自覚できていたことはスタッフの自信となったようで、各児童と落ち着いたコミュニケーションを実現していた。教員や事業所職員からは、児童の興味関心や理解を引き出そうとするスタッフの言動への評価もあった。チームティーチングとしての教員や事業所職員のサポートも効果的で、各プログラムを進めるうえで障害の程度や理解度の差による支障はほとんど感じなかった。

これらの交流は、博物館への認知がほとんどない児童に対し、博物館資料を印象づけることを目的にその知覚観察と体験、および博物館の様子の紹介をおこなった。資料が児童の学習実態に合うのか懸念もあったが、知覚観察や体験はインパクトがあり、関心をもって興味を広める効果をもとめることができた。留意すべきは、子どもたちの年齢と実態からの経験や知識、思考に合うようにすることであった。検証結果である。ただし、知覚観察はコミュニケーションを工夫しても理解を深めることが難しく、児童の集中が続きにくかった。理解するという点にあまり固執せず、印象を深めることに重きを置くのが適切だと捉えられた。

交流実践を通し、子どもたちの行動特性を十分に把握して、教員との細やかな連携のもとでそれぞれに対応する大切さが再認識された。無理強いとなるようなことは個人が主体的に向き合う博物館の学びに反することになり、児童の障害の実態を斟酌しない体験の提供は誤りである。その一方

で、子どもたちの意思や主体性を尊重して、またそれぞれの実態に沿ってプログラムを組み立てて進めることは、出前交流が提供する学びの役割の低下につながるのではないかと当初危惧していた。出前交流で設定している楽しさに重きを置いた体験プログラムは、子どもたちが学習に参加することを導くための手段であり、その先に交流の学びの目的を設定している。個々の体験プログラムは学びの目的ではなく、目的に到達するためプロセスであり、プロセスを適切に経なければ当然ながら十分な学びとはなり得ない。博物館が担う教育は、学習者が自覚することのないなかで享受するスタイルが特徴である。ゆえに、それぞれの主体性や自主性を重視されるのだが、そのなかで博物館の教育の役割を維持することも大切となる。博物館が学びを主体的に提供する出前交流は、その工夫に向き合うことがより求められることを検証した。

## (2) 博物館体験のデジタルコンテンツの制作とウェブサイトの開設

博物館での展示の様子を知り、バーチャル体験ができることを目的に、iPad教材としてのデジタルコンテンツを制作した。バーチャル体験の対象施設は明治大学博物館と和洋女子大学文化資料館を探索するもので、2018年に制作したコンテンツを改訂したものである。

iPad教材は博物館の展示の様子を能動的に観察するアイテムとして制作したもので、普通教育の児童生徒や一般向けのプログラム(komami1.sinsei-kk.co.jp)とともに、知的障害の児童生徒の使用を考慮し、文字説明を平仮名で表記して操作の構造を簡易化したプログラム(komami2.sinsei-kk.co.jp)を整えた。インターネットにアクセスして閲覧できるシステムとし、出前交流ではそれをiPadで体験した。博物館の様子を視覚で捉えるだけでなく、各生徒が自らiPadを操作して博物館の展示を探るスタイルとすることで認知の深化をねらった。iPadは当該の児童たちが授業で比較的扱い慣れているという点を勘案したが、意欲的に操作する者がいる一方で、画面をタッチできない児童もみられた。インターネットを介したソフトにしたのは、授業後に、子どもたちが友人や家族などと一緒にスマホやPCでのバーチャル体験も可能とするためである。

また、ウェブサイト「いんくるん」(<https://www.isc.meiji.ac.jp/~komami/index.html>)を開設した。特別支援教育と博物館の間に立ち、支援教育の場には博物館の資料や作品による学びを提供するとともにミュージアムを利用した学びの魅力と方法を伝え、博物館へは障害のある子どもたちの教育に適った学習プログラムを提案する取り組みを進めるものである。これらにより両者をアクセスコーディネートするつなぎのシステムの実働をねらいとした。内容は、“インクルーシブなミュージアムの情報”“特別支援教育のニーズ”“博物館出前交流プログラム”“ミュージアムの学びのアプリ”“はじめての博物館”の5つのコンテンツからなる。知的障害の特別支援教育とミュージアムのつなぎを主に進めているが、さらには多様な人たちがだれでも一緒に博物館で学び楽しむことのできる取り組みを展開していくことを意図して、コンテンツの構成や内容を工夫した。

このウェブサイトには、知的特別支援学校に向けた博物館学習支援の実態を把握するために実施した調査成果を、データベースとして載せている。それとともに、特別支援学校の教員やサポートスタッフが、博物館に対してどのような対応やシステムおよびプログラムなどを求めているのかを調査した回答データ、また、障害のある子どもたちの日中支援施設などを運営する人たち、さらに子どもたちの家族が博物館に期待していることの調査結果も組み込んだ。双方のコンテンツの発信により、博物館側と知的特別支援教育側の相互理解が進むことをねらいとしたが、ウェブサイトの認知を高める対策が十分にできなかったため、効果は限定的となっている。

また、ウェブサイトコンテンツの“はじめての博物館”は、知的障害の子どもたちにまず博物館の楽しさを伝えて利用意欲を引き出すことに重点を置き、そのうえで利用方法を具体的に伝えるものとした。これまで知的障害の人たちの立場に立ったアクセシビリティの推進は、博物館への行き方やその利用方法をやさしく具体的に示したツールづくりが、国立アトリーサーチセンターなどで

進捗している。しかし、博物館の利用意欲を育む観点で制作されたものはみられず、“はじめての博物館”はその点で独自性を有する。これによりウェブサイトが当該の子どもたちとそれを取り巻く人たちの両者もつなぐものとなり、博物館と知的障害の子どもたちのアクセスコーディネートとの役割をより高めるものとなった。

## (2) 知的障害特別支援教育の博物館活用学習の推進

ウェブサイトによるつなぎをもとに、知的特別支援教育の博物館利用相談を進め、子どもたちの博物館実地学習に取り組んだ。これは重度重複学級を含む中学部2年の生徒グループを、明治大学博物館にアクセスコーディネートした実践である。

事前に引率教員の一部が下見をして博物館の環境確認をおこなった。生徒の体調を整え気持ちを落ち着かせる休憩の時間を多めに確保して、展示観覧は20分程度とした。実施前、学校において実地学習の生徒自身の目的を「博物館で土器をみる」と定め、それぞれが意識できるように対応した。コーディネーターの役割として、教員が抱く博物館への気兼ねのバリアを緩和するべく博物館側と折衝した。見学では、生徒たちがコミュニケーションを交わしながら廻ることをみとめてもらった。生徒の症状によって大声を出すことなどがあった場合は、博物館側とともに他の観覧者に事情を伝えて理解を得るなど、具体的な対応策を整えた。生徒が体調を崩した際の休憩スペースの確保や対処方法も確認した。

見学館は館内照明の照度が全体的に低く抑えられており、重度重複学級の生徒は暗い場所に不安をもつ懸念があったため、常に教員が寄り添い安心感がもてるように対応した。館内では博物館の雰囲気や印象深く感じられるように展示室全体を簡単に廻り、資料観察は生徒の集中力を勘案して土器にしぼった。生徒たちの観覧のスタイルや感覚はそれぞれであったが、案内スタッフや教員への問いかけ、友人との会話も盛んで、多様なコミュニケーションが生徒たちの学習意欲を高めるとともに気分を和らげていた。重度重複学級の生徒も、不安や嫌悪の態度を示さずに落ち着いた様子で土器を観覧し博物館を体験していた。一方で観覧への集中が続かず、大きめの声を発したり床に座り込んだりする生徒もいた。一般の観覧者もいたが、館のスタッフが声をかけて理解を求めたこともあり寛容に受け止めてもらえた。

観覧後の教員への評価の聞き取りでは、生徒たちには慣れない空間であったが、相互に世話をしながらリラックスして博物館体験ができたとの意見が多く、生徒と一緒に教員も楽しめたという感想もあった。学校と博物館の双方が安心できる環境作りに努めた成果と捉えられる。両者の実情を把握してアクセスをコーディネートする存在が、特別支援の子どもたちの博物館利用を押し広げるカギになることが検証できた。また、生徒たちが同行者と会話をしながら観覧できたことをどの教員も評価していた。それぞれが感じた気持ちや驚きなどを、言葉や態度で気軽に分かち合えたことは生徒と教員の満足度をともに高めたようである。

観覧後の生徒との会話から、この博物館体験で生徒たちが土器に関する知識をさほど深めたとはみられなかった。しかし、歴史系の博物館利用がほとんどない生徒も多く、実地体験を通して発見や納得の様子が捉えられ、自由な発想で新たな情報を自ら創出して文化的・社会的な興味を少なからず展開できることを明らかにできた。さらに、生徒たちの観覧の様子の観察から、博物館学習は知識の獲得によって成り立つのではなく、それ以外の体験や出会いや楽しさなどによる感情の高まりにこそ本質があることが検証された。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 駒見和夫	4. 巻 35
2. 論文標題 博物館と知的障害特別支援教育をつなぐ試み（2） - 出前講座から実地体験へ -	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 MUSEUM STUDY：明治大学学芸員養成課程紀要	6. 最初と最後の頁 19,30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 駒見和夫	4. 巻 古代体験研究フォーラム2021
2. 論文標題 博物館がつむぐ特別支援学校との学び	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 「知的障がい・発達障がいのある子ども も楽しめるワークショップデザイン」 事業実施報告書	6. 最初と最後の頁 11,19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 駒見和夫	4. 巻 33
2. 論文標題 博物館と知的障害特別支援教育をつなぐ試み - 出前講座プログラムの工夫	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 MUSEUM STUDY：明治大学学芸員養成課程紀要	6. 最初と最後の頁 1,18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 駒見和夫	4. 巻 23
2. 論文標題 博物館資料に対する知覚アプローチの検討 - 土器資料による実験観察から -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 全博協研究紀要	6. 最初と最後の頁 55,66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 駒見和夫	4. 巻 47
2. 論文標題 コロナ禍を切りひらき転換する博物館の道しるべを模索して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 MUSEUMちば：千葉県博物館協会研究紀要	6. 最初と最後の頁 2,7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 駒見和夫
2. 発表標題 博物館がつむぐ特別支援学校との学び
3. 学会等名 兵庫県立考古博物館 古代体験研究フォーラム2021（招待講演）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 駒見和夫編著	4. 発行年 2024年
2. 出版社 同成社	5. 総ページ数 186
3. 書名 総説 博物館を学ぶ	

1. 著者名 青木豊先生古稀記念発起人会編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 雄山閣	5. 総ページ数 530
3. 書名 21世紀の博物館学・考古学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

いんくるん  
<https://www.isc.meiji.ac.jp/~komami/index.html>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	井上 由佳  (INOUE YUKA)  (90469594)	明治大学・文学部・専任准教授   (32682)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------